

Title	昭和三十六年秋季福井石川懸方面見學旅行記
Sub Title	
Author	田中, 康雄(Tanaka, Yasuo) 香川, 哲(Kagawa, Satoshi) 茂手木, 輝子(Motegi, Teruko) 松崎, 欣一(Matsuzaki, Kinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1962
Jtitle	史学 Vol.34, No.3/4 (1962. 3) ,p.183(437)- 185(439)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19620300-0183">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19620300-0183</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 彙報

昭和三十  
六年秋季 福井石川縣方面見學旅行記

十月三十日八時三十分、福井驛前に集合した今宮・近山・竹田・河北・伊藤・米田の諸先生と學生四十六名の一行は、直に貸切バスにて、武生市の西四軒の織田町の劔神社に向う。同社は織田氏に縁の深い神社で、福井縣下において最も多くの古文書を收藏する神社である。社前で神社の概略の説明を聞き、神護景雲四年九月十一日と陽刻在銘の釣鐘を拜觀後、社務所に準備された藤原信昌父子假名書置文、斯波・朝倉・柴田氏關係文書等多數の古文書類を、同町公民館長水島基氏の概略の説明と河北先生の指導の下に見學、晝食後直ちにバスにて福井市に戻り、市内足羽山上にある歴史館を訪ねた。同館は休館日であったが、特に館長谷口初意氏の厚意により、特に我々の見學を許された。本館には福井を中心とする石器時代より現代に至る迄の關係資料が出陳されて居り、特に安養寺所藏の絹本着色阿彌陀三尊二十五菩薩來迎圖は我々の爲に同寺の好意で出陳されていた。

同館を辭し、足羽山下の藤島神社に參拜した。祭神新田義貞

彙報

は、同市北方燈明寺に戰死し、舊藩時代、同所より兜の發見された所より、新田塚と稱してこれを祀つたのを、明治九年、現在の地に移したのである。社寶の兜・大刀・結城宗廣書狀等を見學後、同社より程近い淨得寺を訪れ、舊前田家所藏で狩野永徳筆と伝えられる紙本着色世界及日本國屏風を河北先生説明のもとに拜觀した。同屏風は、作者並に製作年代に關し、學界に論争があり、まだ定説をみないもので、興味深く見學した。

一應の予定を終へ旅館の都合で分宿したのであるが、一部有志は河北先生と共に、橋本左内墓由利公正舊宅趾・グリヒス舊宅跡等を見學して歸館し、更に夕刻より塾員内田清氏の好意により、中島織物工場並に福井精練工場を見學した。

十月三十一日、貸切バスにてあいにくの雨をつけて永平寺に向う、志比谷の老杉の中に位置する當山は「日本第一曹洞道場」の名にふさはしい威嚴と環境をもつていた。一通り拜觀後鳳來坊にて精進料理の晝食を攝り、時間の關係で寺寶の見學は出来なかつたが、強い印象を受け、再びバスに乗り、丸岡に向つた。天正三年、柴田勝家の甥勝豐の築城という丸岡城は、昭和二十三年の福井大震災で破損したのを再建したもので、外觀は二層、内部は三層の石瓦葺で、僅に往時をしのばせるものがあるが、石段等變更された部分も多いという。

越前の古湊として知られる坂井郡三國町の滝谷寺を訪れる。當寺の稱呼は案内書により異なるも、當山ではタキタニデラと

稱するとのことである。永和三年叡憲上人の創建という。古文書等寺寶の多くは散逸してしまつたとの事で残念であつた。なお本寺のかたはらに千代女と並び稱される女流俳人歌川の墓があつた。

東尋坊に出て休憩の後、蓮如上人、一向一揆で有名な吉嶮を経て、本日の宿泊地山代に着いたころはすつかり暗くなつていた。

十一月一日、北陸鐵道で那谷寺下車、那谷寺に參拜、養老元年泰澄大師建立、花山上皇參詣の折、その風光に感じ西國三十三所觀音巡拜の要なしとして首尾の那智谷汲の寺名各一字をとつて那谷寺と稱したと云う。前田利常再建の本堂大悲閣・三重塔・護摩堂・鐘樓・寶物館等を一巡の後特に好意により、江戸時代初期の特色を示す、一般未公開の書院を見學、直に再び那谷寺驛より栗津經由金澤到着、驛前にて晝食後兼六公園に向う。

文政二年前田齊廣造營の本園は、廣大・幽邃・人力・蒼古・泉石・眺望の六勝を兼具する所より松平定信が推賞して命名したという、自然の地形を巧みに利用した廻遊式庭園はさすがに三名園の名に恥じないものである。特に霞池水汀の琴の形をした檼燈籠モトナは興味をひいた。文久三年前田齊泰が母眞龍院の隱居所として建てた成巽閣をみる。江戸末期の代表的武家造で、ギヤマンが用いられ、多くの道具類が陳列されていた。文祿年間前田利長の手により、舊本願寺門徒の據點尾山城を修築した

という金澤城を右手にみつづ能樂堂に向つた。金澤は藩祖利家以來謠曲の盛な所で、加賀寶生に關する詳細な説明を受けた。

十一月二日、貸切バスにて羽咋に向う。幕末の豪商錢屋五兵衛が埋立を策したという河北瀉を車窓に眺め、千里濱チリのドライブコースの快適さを満喫しながら、能登一宮氣多社に到着、あいにく戦歿者慰靈祭の爲目的の後奈良天皇女房奉書は見學出來ず、神門・本殿を簡單に見學後、隣接の神社別當寺であつた正覺院に至り、本尊阿彌陀如來像(藤原中期)、不動明王像、前田利常寄進香時計等を拜觀、古文書も多數收藏するというが未整理のため數點を拜見したに止まつた。

同寺を辭し、海岸近くの松林中にある、折口信夫先生の墓に詣で更にバスにて妙成寺へ向つた。永仁二年日像上人開基と傳え、後前田利常より綱紀に至つて完成した本寺は、北陸に於ける日蓮宗本山で、山門・鐘樓・祖師堂・本堂・三光堂・祈願堂・五重塔・經堂・書院と重要文化財の建造物を寺僧のユーモラスな説明で簡單に一巡後書院で晝食、食後寶物館を見學した。信春筆釋迦涅槃圖、傳教大師筆と傳える寫經斷片など興味をひいた。本寺の前寺號であると傳へる滝谷寺の名の制札も數點存した。

再び羽咋市へ戻り、總持寺開祖瑩山の開創と傳える豐財院を訪れた。馬頭・聖・十一面三觀音像は藤原初期の作と云はれる秀作である。中興の祖月潤と規外の血書大槃若經六百卷や梵鐘等

を見學した。交通不便の能登の地に遣された文化財の豊富さと優秀さは、我々に多くの感銘と問題を與へた。かくて四日間にあつた全行程を終了、史囊を豊にした一行が解散地金澤に到着したのは午後四時頃であつた。

末筆ながら今回の旅行に際し、種々御世話をいただいた各方面の方々に厚く感謝の意を表する次第である。

(田中康雄・香川哲・茂手木輝子・松崎欣一)

### L. C. Goodrich 博士講演會

昭和36年12月1日、西校舎301番教室において、コロンビア大學教授L. C. Goodrich 博士の公開講演會が催された。演題は

China's earliest contacts with outside world

同博士は米國ダンフォース財團の好意により來日されとくに本塾のため講演されたもので、數十枚のスライドを使用し多年の研究の諸成果を極めて要領よく平易に話され、聴衆を啓發するところが多かつた。

### 第469回三田史學會

卒業論文發表會

第1日 1月30日(火) 午後1時 於32番教室

彙報

國史 東洋史(一部)

第2日 2月1日(木) 午後1時 於2番教室

東洋史(二部) 西洋史

卒業論文題目

國史の部

掛物の歴史

山 崇 拜

大學寮別曹の研究

日本史に現われた感性と知性(原始・原史時代編)

秀吉の小田原城攻略戦史

薬師如来像について(飛鳥時代から藤原時代までの變遷)

瀬戸内海の縄文文化(特に吉備地方を中心として)

日本に於ける漁網工業の成立とその變遷

狂言と臺本

戦前の日本映畫産業の發達

白鳳時代の再検討と其の中に於ける所謂法隆寺式伽藍配置について

豊臣秀吉の大阪築城に關する一考察

寺式伽藍配置について

寺式伽藍配置について

寺式伽藍配置について

寺式伽藍配置について

遠藤隆夫

藤澤貴美

犬塚富士夫

石川町子

賀茂直光

加藤佐和子

北村勉

宗村南男

小澤壽美子

田邊幹夫

角田裕

山崎隆三